

ロシアにおける豆類の生産流通等の概要

(公財) 日本豆類協会

公益財団法人日本豆類協会では、豆類の生産において国際的に大きな地位を占める国を対象に、外部機関に委託して豆類の生産流通等に関する現地調査を実施しています。本調査は2021年6月から2022年3月までの期間で、同国の豆類を取り巻く環境や生産・輸出の状況などについて、現地の専門家等を駆使して実施したものです。以下にその概要を報告します。

なお、本調査は基本的には2022年2月24日におけるロシア軍のウクライナ侵攻以前に実施されたものであり、この侵攻が及ぼすロシアにおける豆類の生産や国際市場への供給に対する影響については考慮されていません。以下の調査概要をお読みいただく際には、そのことを十分に念頭においていただくようお願いいたします。



出典：日本外務省（※赤丸が日本大使館設置都市、白丸が領事館設置都市）

1. ロシアの概観

日本の45倍にあたる1,710万平方キロメートルの国土面積を持つロシアには約1億4,500万人が暮らす。国土のほとんどが北極、ツンドラ、タイガ等極めて寒冷な気候にあり、人口はロシア国土の西部、東部および南部に集中している。豆類の主たる産地であるロシア南部や日本との交流がある極東地域の植生は針広林混交林と位置付けられ、冬場の月別平均最低気温はマイナス13～17度、夏場の平均最高気温は23～26度と日本では北海道に近い。主要産業は鉱業であり、石油、石炭、天然ガス等の相場や生産量・輸出量の変動によって国の経済状況が大きな影響を受ける。

2. ロシア農業の概観

ロシア農業省の資料によると 2019 年のロシアにおける農業分野国内総生産は 595 億ドルで国内総生産全体の 3.5%にあたる。農地はロシア全土の 12.8%にあたる 21,549 万 ha、日本の約 50 倍である。主要農産物は小麦、てんさい、大麦、ばれいしょ等で、ソ連時代は穀物の輸入国であったが、現在は輸出国になっている。

なお、国家プロジェクトとして、穀物や油糧作物など農産物の輸出を 2017 年の 216 億ドルから 2024 年までに 450 億ドルへ拡大することを目指している。

一方、ロシア農業省は、農業経営に関してはソ連崩壊時に小規模に分断された農地を集約して効率的な農業を実現することを目指すとともに、個人経営から会社等法人化を進めている。

3. ロシアの豆類生産

3-1. 概要

ロシアでは現在、マメ科作物は食料と家畜飼料として利用され、広大な領地をもつロシア連邦全土においてもマメ科作物は広く分布している。ロシアで多く播種されている一年性のマメ科作物は、エンドウ、ダイズ、飼料用の豆 (fodder beans)、レンズマメ、牧場 (ranch)、インゲンマメ、ヒヨコマメなどである。これらマメ科作物の播種面積は、ロシアの総耕地面積の 3.8% (167 万 ha) を占めており、穀物の生産量におけるシェアは 2.1% (230 万トン) となっている。ロシア国内における雑豆に対する需要も生産量も近年増加傾向にあるが、生産の主体は基本的に小規模の生産者であり、生産量も全体としてはまだ少ない。

ロシアにおける雑豆類の中で最も広い播種面積を持つのはエンドウで、次いでヒヨコマメとなり、この 2 つの雑豆で雑豆全体の播種面積の 84.6%を占めている。

3-2. 雑豆類の生産状況

(1) 雑豆類全体

ロシアにおける雑豆類の中で一番生産量が大きいののはエンドウであり、2019 年で約 237 万トンとなっている。次いでヒヨコマメが約 51 万トン、ヒラマメ (レンズマメ) 約 12 万トンの順になっている。

2010 年時点でエンドウの生産量が約 122 万トンに対し、2019 年には約 2 倍まで生産量が増加している。ロシアの研究機関推計の最新データでは、2021 年のエ

エンドウの収穫量は約 294 万トンとなる見込みで、さらに増加するとみられる。

その他、ヒヨコマメ、ヒラマメ

(レンズマメ) の生産量も近年増加傾向にある。なお、インゲンマメについては 2010 年と比較して大きな収穫量の増加はみられない。

ロシアにおける豆類の収穫量 (2019 年)

	2010年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
エンドウ	1,217.60	1,714.80	2,198.20	3,285.50	2,304.40	2,369.50
ヒヨコマメ	(データなし)	(データなし)	320	418.6	620.4	506.2
ヒラマメ	5.4	25.4	65.2	197.9	194.7	116.6
インゲンマメ	5.3	5.5	7	4.4	5.4	5.7
その他雑豆	(データなし)	(データなし)	349.4	355.7	310.6	346.2

資料：FAOSTAT

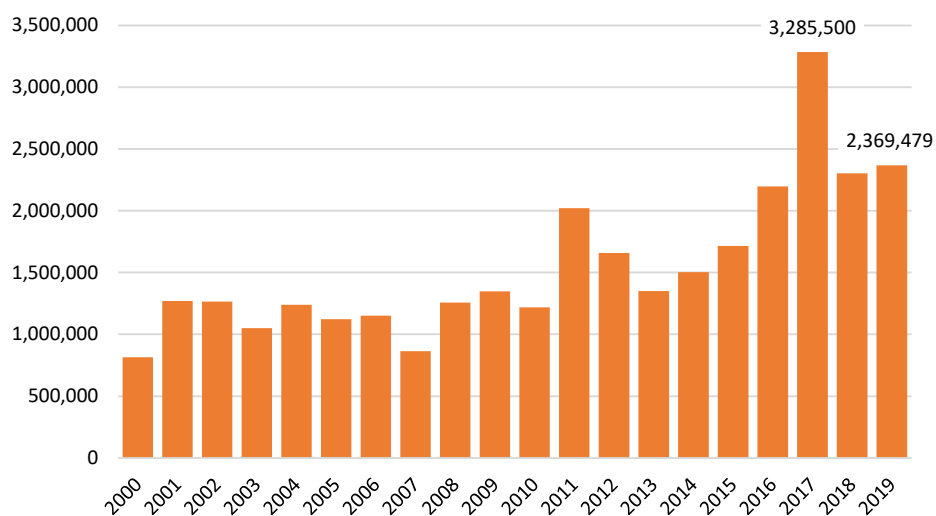
(2) エンドウ (Peas, dry)

エンドウはロシア国内で最も多く生産されている雑豆類である。FAOSTAT のデータでは、直近 2019 年で 237 万トンの生産があった。

なお、近年のロシアにおけるエンドウは以下のような推移を辿っている。

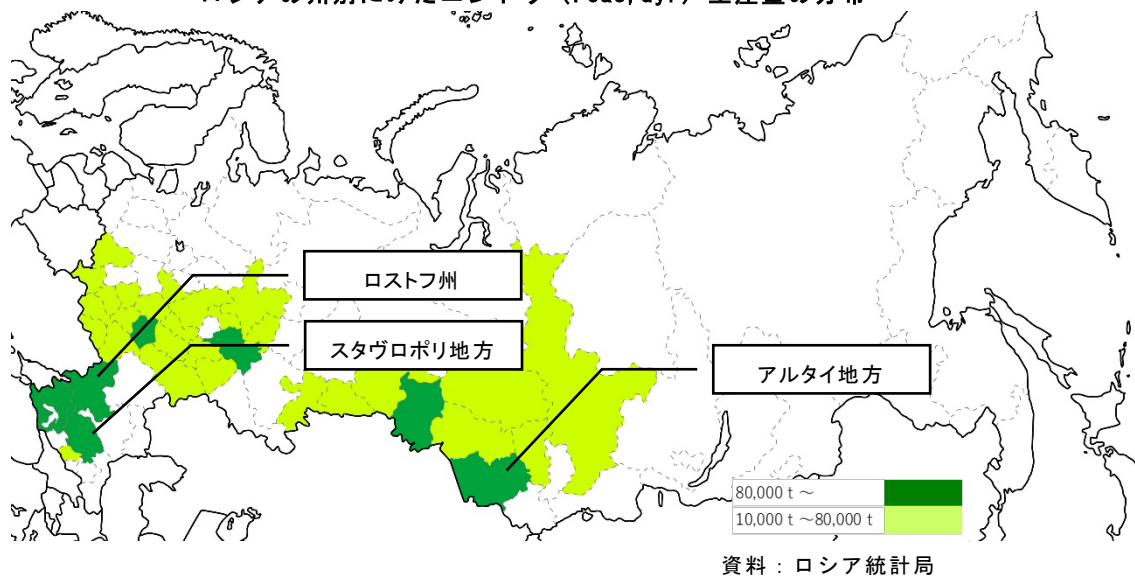
- ・ 2019 年には播種面積にわずかな減少があり約 125 万 ha となったが、その前年の 2018 年には 1995 年以来最大の約 144 万 ha に達していた。
- ・ 2018 年は、播種面積は最大であったが、収量が減少したことにより収穫量は 2017 年と比べて大幅に減少した。
- ・ 2019 年は播種面積が減少したが、収量が前年に比べて増加したため収穫量は増加し約 237 万トンとなった。

単位:トン
ロシアにおけるエンドウ (Peas, dry) の収穫量 (2000-2019 年)



資料：FAOSTAT

ロシアの州別にみたエンドウ (Peas, dyr) 生産量の分布

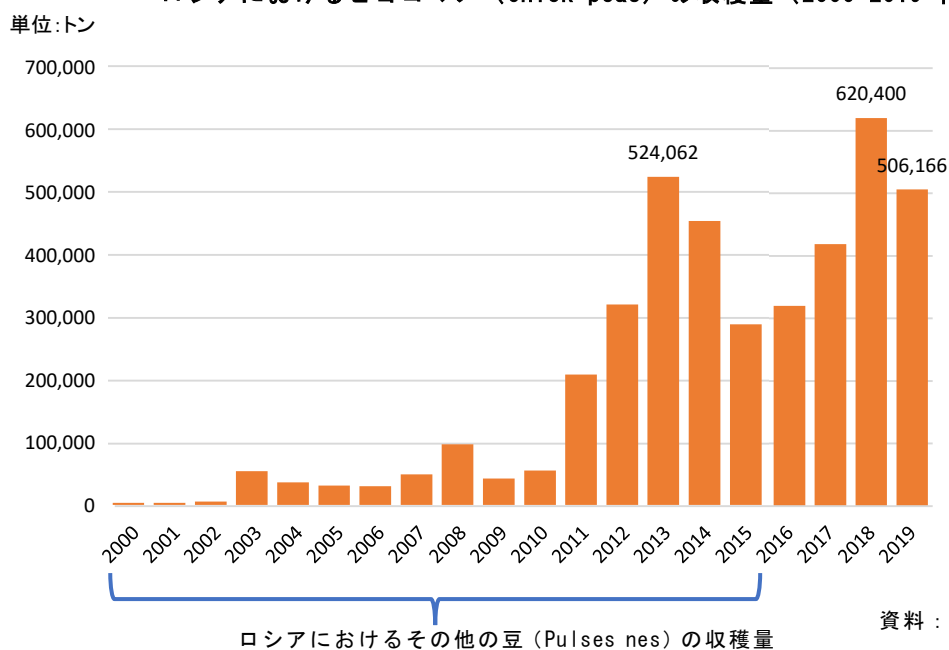


(3) ヒヨコマメ (Chick peas)

ヒヨコマメ (Chick peas) はロシアでは「トルコ豆」とも呼ばれており、輪作作物として農業技術的価値が高いと評されている。

FAOSTAT のデータでは、直近 2019 年で約 51 万トンの生産があった。なお、FAOSTAT のデータでは Chick peas の収穫量は 2016 年からのみとなっているが、2015 年以前は「その他の豆 (Pulses nes)」に含まれているとみられる。

ロシアにおけるヒヨコマメ (Chick peas) の収穫量 (2000-2019 年)



ロシアの州別にみたヒヨコマメ（Chick peas）生産量の分布



資料：ロシア統計局

（４）小豆

小豆については、ロシアの統計上には出てこない。しかしながら、アムール州に拠点を持つ雑豆生産企業により生産されていることが確認されている。ただし、特に戦略的生産ではなく、家族消費の栽培や試験栽培を行うにとどまっている。

なお、極東農業研究所の支部である沿海地方国立農業試験場では2012～2015年頃、日本企業などと共同で大豆、そばとともに、小豆、緑豆の試験栽培を行った経験がある。その後、日本企業との試験栽培や事業化までは継続できなかったが、現在ではこれらの品目について韓国企業と共同研究を進めている模様である。

アムール州に拠点を持つ雑豆生産企業の小豆栽培の様子



資料：ロシア統計局

3. ロシアの豆類の輸出入

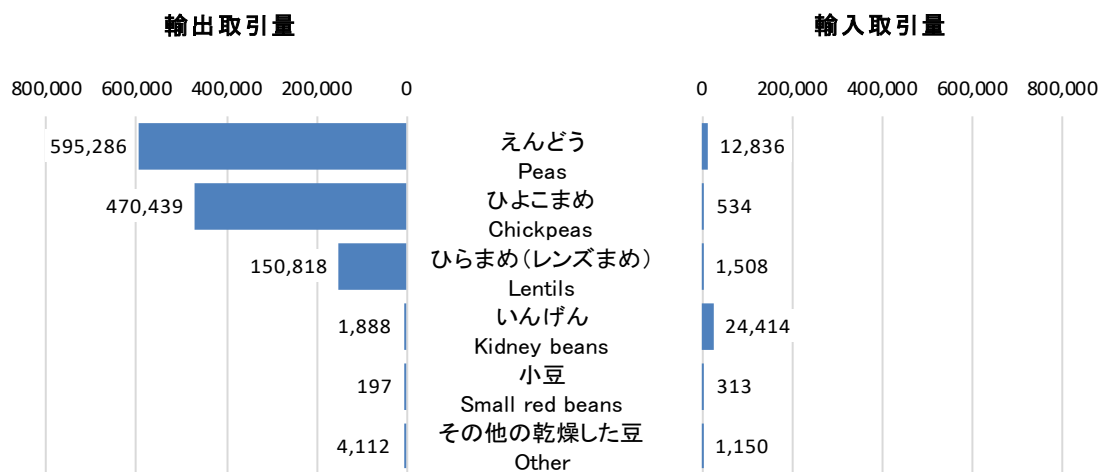
(1) 雑豆類全体の輸出入

雑豆類に関しては、生産量と同様にエンドウマメ、ヒヨコマメの輸出量が多くなっている。ただし、エンドウマメについては、国内での消費が多く、ヒヨコマメについては輸出が主であると考えられる。

なお、インゲンマメについては、輸入量が輸出量を大きく上回っている。小豆もわずかであるが輸入量が輸出量を上回っている。

ロシアにおける乾燥した豆の輸出入量（2019年）

（単位：トン）



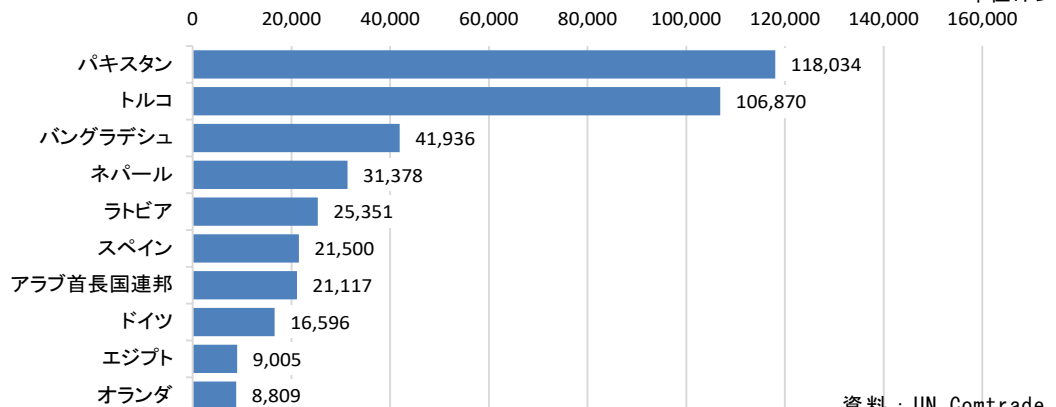
資料：UN Comtrade

(2) エンドウ (Peas) の輸出

2019年にロシアから国外へ輸出されたエンドウの総量は約60万トンであり、そのうちパキスタンへ約12万トン（19.8%）、トルコへ約11万トン（18.0%）、輸出されており、この2カ国でロシアから輸出されるエンドウ全体の37.8%を占めている。

ロシアからのエンドウ (Peas) の輸出取引量（2019年）

単位：トン

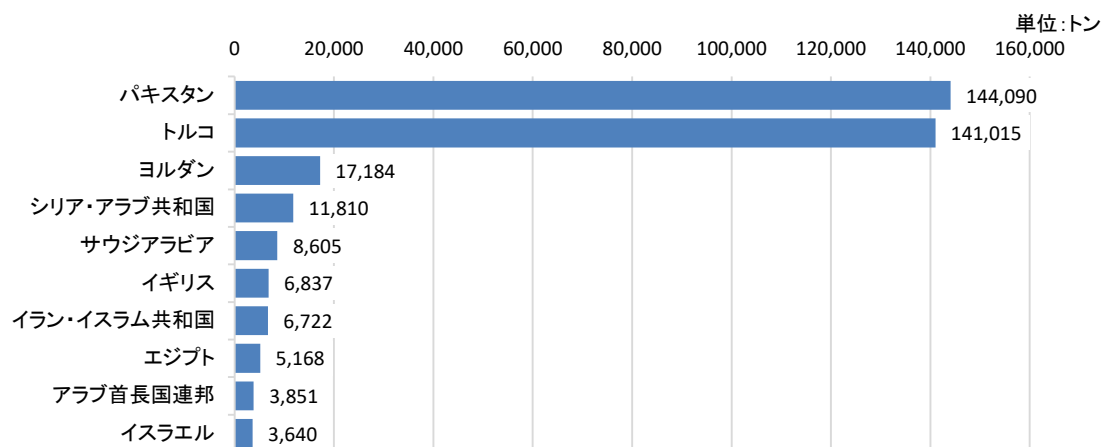


資料：UN Comtrade

(3) ヒヨコマメ (Chick peas) の輸出

2019年にロシアから国外へ輸出されたヒヨコマメの総量は約47万トンであり、そのうちパキスタンとトルコへ約14万トンずつが輸出されている。この2カ国でロシアから輸出されるヒヨコマメ全体の60.6%を占めており、エンドウと比べさらに占有率が高くなっている。

ロシアからのヒヨコマメ (Chick peas) の輸出取引量 (2019年)



資料：UN Comtrade

4. 最近の情勢

小麦、大豆などのロシアからの輸入拡大については日ロ経済協力のテーマであり、両国の産官学が連携して進めてきた。当初の懸念事項としてはロシアにおける品質管理体制やロシア政府による輸出制限などへの対応等が考えられた。また、輸出用小豆の生産に関してロシア極東など数社が関心を示していた。

しかし、2022年2月24日のロシア軍のウクライナへの侵攻によって事態は一変し、我が国のロシア経済分野協力担当大臣が「ロシアとの経済分野の協力に関する政府事業については、当面見合わせることを基本」とすると発表したことによつてすべての事業が中断されることとなった。

この侵攻によってロシアだけでなく、世界的な穀物の産地であるウクライナからの国際市場への豆類の供給が当面難しくなり、ロシアやウクライナから豆類を含む穀物を輸入している南アジアや中東等の地域での食糧安定供給に多大な影響を与えることとなっている。

今後は戦争状況が終結し、両国が世界の食料安定供給に今まで以上に重要な役割を果たす日が1日も早く来ることを祈るばかりである。